

一、出來得る限り田園生活をなせ

一、休暇は長く續けるな併し度々すべし

一、欲望を制限し忿怒を避けよ

一、三個のDを避けよ、水を飲むと Drinking-

Water 湿地 Damp 下水 Drains

貞一の日記 (明治卅六年五月 (拔萃) 母一日年男兒 (承前))

その母

三月十五日 水鼻少し出で、咳も時々出づ、午後

四時頃、咽喉かゆきか、エー〜といひ居りし

が、少しく水を吐く、

今日は、父の誕生日なれば、御祝ひあり、父よ

り、皆々へいろ〜の物を贈られ、貞一は、風

船をもろふ夕飯後父に抱かれ、ピヤノの室に行

き、母は面白き曲を弾く、貞一にはコチロンで

なければ、氣に入らぬなり、エー〜といつて

やめさす、瀛車〜はしれの歌をひけば、シユ

ツ〜といふ、瀛車のつもりなり、

朝 ミルクトースト、牛乳一〇〇瓦

晝 粥二椀、魚あまだい。

ふやつ ミルクトースト、牛乳七五瓦

夕 粥二椀、あまだい

三月廿日 朝、床の中にて、マンマ〜といふ故

母アイヨと答へしに、おもしろがりて、アイヨ

〜と、真似す、此頃は、御辭儀、少し上手に

なり、父母學校より歸りて、只今といへば、腰

を變に曲げ、頭を一寸下げる様子可笑し、

食卓の上へ上げてやりしに、夫が大變氣に入り

て、それよりはしきりに、上げよとせがんで、

上げてもらひ、また下せといつては、おろして

もらつて、居つたのが、後には獨りで、ずん／＼上り下りする様になる。

三月廿一日 父の按摩させるを見、不思議そうに、按摩さんの顔を、眺居りしが、コー／＼といふ、眼を閉ぢたるを見て、眠りしものと思ひしなり。
三月廿三日 此頃は、母の不在中は、中々大人しく、母歸れば、あまへて、一寸しても泣き、又ひつくりかへりて、あばれる。

三月廿五日 今日例よりは、元氣なき様なりしも、母學校より、歸りて教は、マヒ／＼トソボをして、室の中を、ぐる／＼まわり、眼がまわつて、倒れそうになるのをよるこぶ、

昨日よりは咳の數、多くなりたり。

三月廿六日 小原先生の許に行く、体量減じ居れり、風邪の爲めならんと、九一六〇、〇瓦

三月卅一日 父學校へ出る時、また歸る時、皆玄關に出でても、ばわや居らぬ時は、ばわ／＼と呼ぶ、御容のある時も全じ

四月一日 咳は余程よろし

夕刻おもちや箱より、おもちやを一個づゝ、出してはならべ居りしが、鉛の時計を、持ちて耳におしあて、音の出ぬを、不思議そうに、幾度も／＼、聞き居たり、

今迄母、學校に行く時、あとをおふて泣く故、かくれて出で行きしが、かくては情忌の心を、抱かす恐あれば、本日よりは泣いてもかまわずいとまをつけて出で行く事にす、

四月二日 夕方食卓の上に、兩手を出して、ピヤノ弾く眞似して、遊び居りしが、何を思ひしか、急に眼をとぢて、すまして弾く、

咳昨日より多し、

割烹

石井泰次郎

鹿尾藻の白わへの拵方

砂糖	みりん酒	堅魚煎汁	醬油	豆麩	醬油	みりん酒	砂糖	堅魚煎汁	乾鹿尾藻	鹿尾藻の白わへの拵方
六	四	八	五	四	九	四	二十	二	二十	石井泰次郎
匁	勺	勺	勺	箇	勺	勺	匁	合	匁	

ひじき藻を、水に暫く漬けてやわらげ置き、柔らかになりたる時、取上げて水を切て、鍋に湯を入れたるに、入れて二十分間湯煮して、上の泡をすくひ去りて、取上げて湯を切りて、別の鍋に、だし、さたう、みりんを入れ、其中へひじきを入れて、醬油を入れて、煮ること二十分間して、鍋をかるして、ざるにひじきを取わけおくべし、
 とうふを布に包みてしぼりて、搦盆に入れて、すりて其中へ、醬油、だし、みりん、砂糖を合せて、鍋に入れて煮たるものをつぎ入れて、
 右のひじきを、入れて、箸にてかきあはせおきて、皿にもりて出すべし、

○ひじきにかぎらず、何にても、このわりにてあへて、つくりこゝろむべし、
 これはたやすき日用惣菜の仕方なれども、たい見